

戦略的創造研究推進事業  
(社会技術研究開発)  
平成29年度実装活動報告書

研究開発成果実装支援プログラム  
「エビデンスに基づいて保護者とともに取り組む  
発達障害児の早期療育モデルの実装」

採択年度 平成28年度

実装責任者 熊 仁美

(特定非営利活動法人ADDS、共同代表)

## 1. 要約

29年度は、親子共学型の早期療育プログラム「ぺあすく」を安定的に提供できる人材育成と運営システムの構築を目指し、5つの連携機関に対してAI-PACの実装と定期的なスーパーバイズを行った。

実装を担うセラピストは、全機関で合計35名の育成が完了した。その結果、29年度の4月～9月の第1期は15家庭、10月～3月の第2期は約65家庭の計80家庭に提供が完了し、事前事後評価の結果、参加児の発達指数や語彙数の向上といった成果が示された。

セラピストの継続的なスキルアップシステムとしては、慶應義塾大学と連携して応用行動分析学の国際資格テキストを軸とした定期的な研究会を開催した。また、資格更新との連動を想定した地域研修会を、神奈川県、千葉県、香川の実装機関と連携し、自治体等の後援を得て開催した。その結果、それぞれの地域の支援者や保護者約100名が参加した。また、言語聴覚士など国家資格保有者に限定した研修会の開催や、放課後デイサービスにおける事例研究型コンサルテーションを行うなど、実装成果を多領域に拡大した。

1年間の成果報告の場としては、連携機関と慶應義塾大学と共同して29年度公開シンポジウムを実施した。厚生労働省の後援を受けて開催した結果、全国から約250名の療育や行政関係者が参加した。

これらのシンポジウムや研修会といったアウトリーチ活動を通じて、実装の要望があった機関を選考した結果、児童発達支援事業所2つ（千葉・神奈川）と、就学後の支援を行う放課後等デイサービス1つ（東京）が新たな実装先として確定した。

また、研究成果や本実装における取組が認められ、鎌倉市の障害児通所支援施設公募の借受け事業者として当法人と放課後等デイサービスミライエの共同事業体が選定された。4月に開設する由比ガ浜こどもセンター内の障害児通所支援施設にて、「ぺあすく」の提供と、AI-PACを活用した就学前後の連携支援を提供することが可能となった。

## 2. 実装活動の具体的内容

**(1) 「ぺあすく」プログラムの運営システムの構築**：e-learningと療育体験を通じた親子共学型の個別療育プログラム「ぺあすく」について、連携機関へ実装を行った(図1)。実装先は、横浜市南部地域療育センター（神奈川）、Bring up ちば こども発達センター（千葉）、児童発達支援マルシェ（神奈川）、NPO法人子育てネットくすくす（香川）、児童発達支援ままとこテラス（熊本）の5拠点であった。

各機関に月2回程度スーパーバイズに入り、発達課題の構成や保護者対応、プログラム運用等について支援をした結果、すべての機関で「ぺあすく」の提供を開始することができた。29年度は、4月～9月の第1期に15家庭、10月～3月の第2期に65家庭の計80家庭に提供が完了した。事前事後評価の結果、参加児の発達指数や語彙数の向上といった成果が示された。また、各機関で、第3期の保護者説明会等を行った結果、70家庭の参加が決定した。

**(2) AI-PAC ONLINEの実装**：29年度4月から各連携機関へAI-PAC ONLINEの実装を開始し、定着支援を行った。その結果、AI-PACに基づいた発達課題の構成や記録用紙の作成、教材の活用が全機関で実施できるようになった(図2)。また、オンライン環境が整わない場所でも活用できるよう、29年度10月より、AI-PACの内容をテキスト化する作業を開始した。連携機関へのヒアリングの結果、操作性の向上や、オンラインでの記録や動画共有、対象児童の発達アセスメントに合わせた推奨課題の設定といった新機能の追加を目指し、30年10月を目指したAI-PACのバージョンアップに着手した。



図1 連携機関における「ぺあすく」プログラムの様子

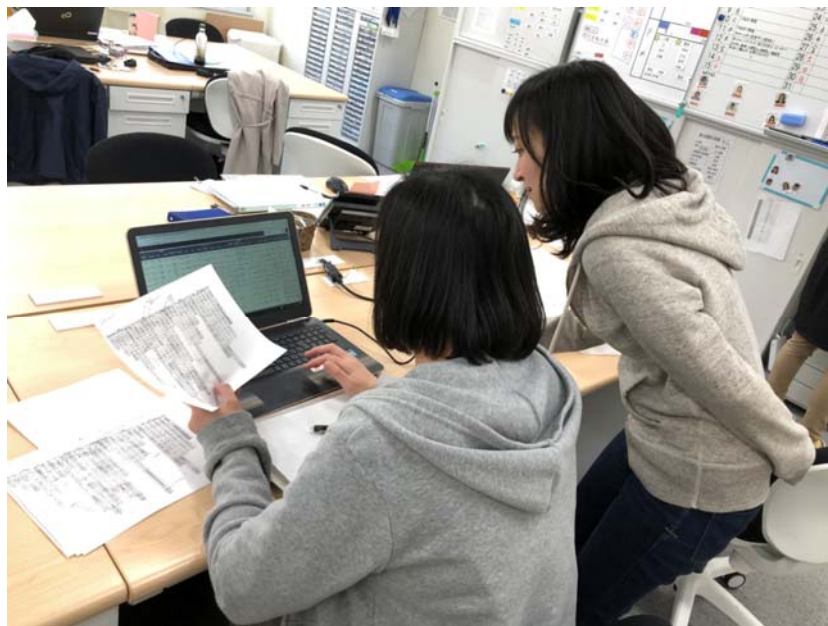


図2 連携機関におけるAI-PAC活用の様子

**(3) セラピスト養成と資格認定システムの試験運用**：25名のセラピストの養成が完了し、全機関で合計して35名となった。養成が完了したセラピストのスキルアップの仕組みとして、国際資格として認定されている認定行動分析士(Board Certified Behavior Analysts; BCBA)の育成カリキュラムを参考に、慶應義塾大学と連携した研究会「ABA Institute Academy」を実施した(図3)。主な対象は、セラピスト研修に合格しており、ADDSを含む各療育機関においてすでに一定の実績をつんでいる者15名程度であった。研究会は、全10回中7回が29年度中に終了しており、今後も集中研修と現場でのフォローアップ等を通じて継続して育成を実施していくこととなった。

また、連携機関の代表者と当法人でセラピスト認定協会(仮)の設立に関し、会議や関係者へのヒアリング等を実施した。その結果、まずは継続的なスキルアップシステムの構築を目指すため、資格更新との連動を想定した地域研究会を開催することとなった。香川では、地域の大学と連携し、神奈川、千葉では、それぞれ横浜市、千葉市の後援を得て開催した結果、支援者や保護者など約100名が参加した(図4)。



図3 慶應義塾大学におけるABA Institute Academyの様子



図4 地域研究会の様子(左：神奈川, 右：香川)



**(4) 行政や民間企業と連携した地域実装：**研究成果や本実装における取組が認められ、鎌倉市の障害児通所支援施設公募の借受け事業者として、当法人と株式会社セントスタッフ（放課後デイサービスミライエ）の共同事業体が選定された。30年4月より由比ガ浜こどもセンター内の障害児通所支援施設（図5）にて、「ぺあすく」の提供を開始すると同時に、同施設内の放課後デイサービスミライエにおいても、AI-PACに基づく療育支援を行う。それにより、AI-PACを通じた就学前後の連携モデルの構築を行うことが可能となった。



図5 由比ガ浜こどもセンター内の障害児通所支援施設

**(5) 実装成果の多領域への拡充：**医療やリハビリテーションの立場から発達障害に関わる人材へのアプローチとして、行動リハビリテーション研究会と連携し、有資格者向けの研修会を開催した。「発達障害児に対するリハビリテーション研修会 -介入効果を高める応用行動分析を用いた関わり-」と題し、セラピスト養成研修を基とした2回の連続研修を実施した結果、言語聴覚士、作業療法士、理学療法士などの有資格者20名に提供が完了した（図6）。AI-PACを就学後の児童の支援に生かすためのアプローチとしては、放課後等デイサービスミライエとの連携を行った。AI-PACを個別指導のカリキュラム構成に活用するとともに、3名のセラピストに事例研究型のコンサルテーションを実施した。単一事例研究法に基づいた指導手続きの確定や、記録の取り方などについて研修をおこなった結果、3名の研究参加児の言語や模倣等の改善に成果を示した（図7-1, 2）。



図6 発達障害児に対するリハビリテーション研修会

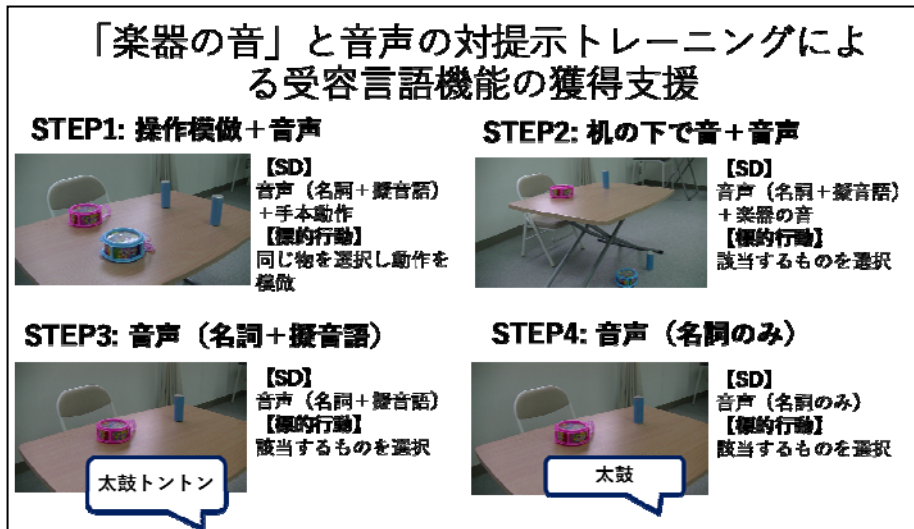


図7-1. 放課後デイサービスにおける事例研究の例（指導手続き）

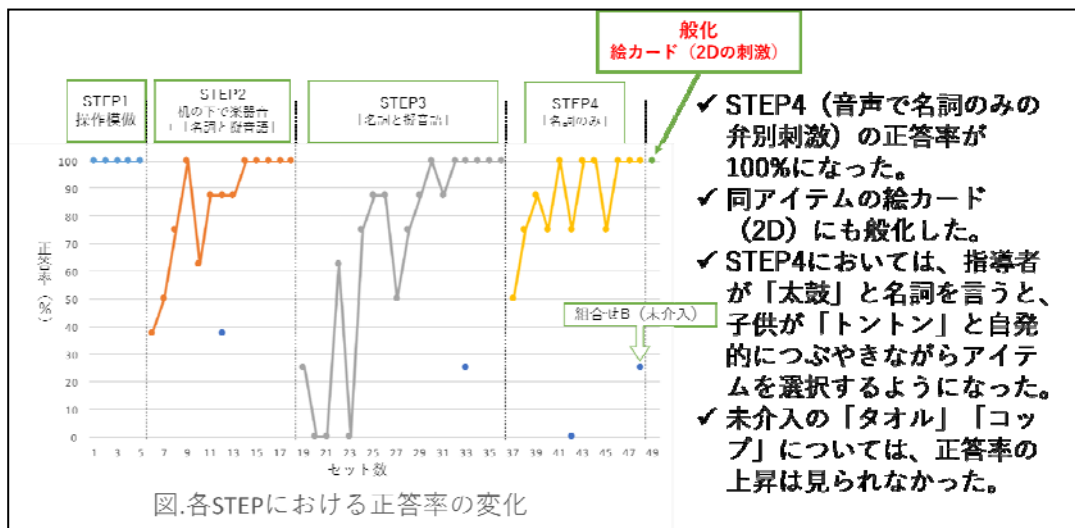


図7-2. 放課後デイサービスにおける事例研究の結果

(6) 情報発信やアウトリーチ活動と実装先の拡大：10月に福島で行われた日本行動分析学会第35回年次大会でのシンポジウム「日本の療育・保育・教育におけるABA活用の課題と挑戦」において、本実装プロジェクトの概要について発表を行った。

12月には、各機関での実装成果をもとに慶應義塾大学にて公開シンポジウムを開催した（図8）。参加者は、東京、神奈川、埼玉、千葉を中心に、静岡、長野、香川、高知、熊本、福岡、愛知などの公・民の療育や行政関係者250名であった。シンポジウムでは、本プロジェクトについて紹介した後、各連携機関の代表者が「ぺあすく」やAI-PACの実装成果を報告した。また、RISTEXで過去に採択された発達障害研究の代表者や、厚生労働省発達障害対策専門官等を招き、発達障害の早期療育における我が国のベストプラクティスについて多方面から検討する目的で、公開パネルディスカッションを実施した。終了後、参加者アンケートの集計を行った結果、約8割が自身の現場で取り入れられそうなポイント

があったと回答した。実装を受けたいかどうか、という問いに関しては、約5割が受けたいと回答した（図9）。また、8割以上が来年度のシンポジウムも参加したいと回答した。これらのアンケート結果は、レポートとしてまとめ、WEB上に公開した。

また、これらのアウトリーチを通じ、新たに実装を希望する機関を選考した結果、一般社団法人キッズライン（神奈川）、児童発達支援にじいろデイズ（千葉）の2機関が新たな実装先として確定した。



図8 29年度公開シンポジウムの様子

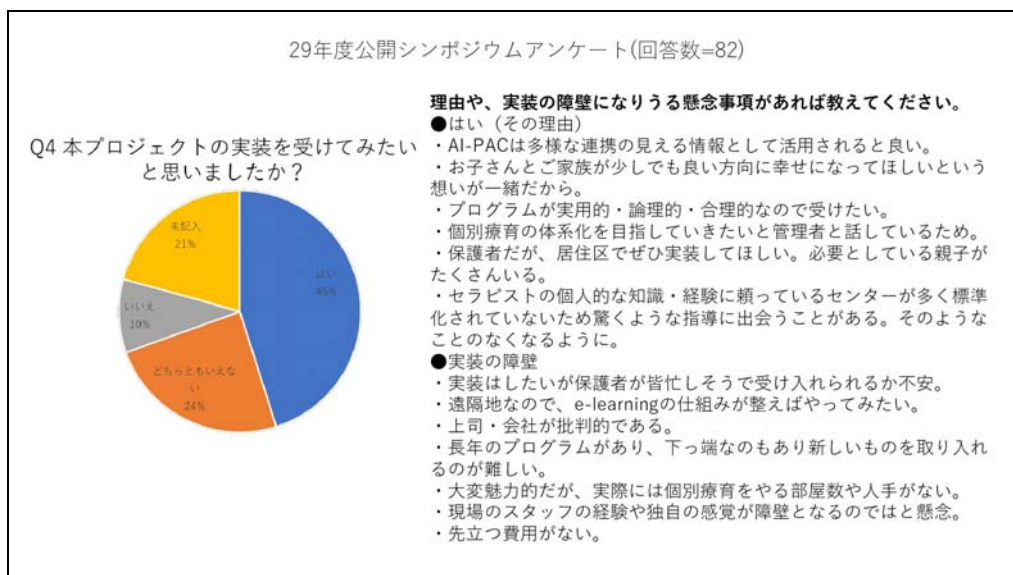


図9 29年度公開シンポジウムにおけるアンケート（一部抜粋）

### 3. 実装成果の発表・発信状況、アウトリーチ活動等

#### 3 - 1. 展示会への出展等

#### 3 - 2. 研修会、講習会、観察会、懇談会、シンポジウム等

年月日	名称	場所	概要	ステークホルダー	社会的インパクト
(1)7/20 (2)9/27 (3)10/25 (4)11/29 (5)1/31 (6)2/14 (7)3/7	ADDS ABA Institute Academy	慶應義塾大学グローバルセキュリティ・リサーチセンター4階セミナー室	連携機関の支援者を対象に、月1回水曜18:30~21:00に定期開講(全10回)した。慶応大学山本教授を講師に迎え、応用行動分析の国際資格であるBCBAのテキストの輪読と、事例検討を実施した。	連携機関の支援者	15名
10/11	発達が気になる子の地域研修会(香川) 「見守る支援のその先へ～応用行動分析(ABA)による子育て支援～」	善通寺市総合会館	四国学院大学の野崎晃広教授を迎え、前半はABAを活用した子育て支援について、後半は、ADDS竹内より本プロジェクトの解説とABAに基づく個別支援と子育てへの活用についてワークショップを行った。	保護者、療育・教育機関関係者、行政関係者	40名
10/29	発達が気になる子のための地域研修会(神奈川) 「地域療育センターにできる超早期のお子さんと保護者への支援」	神奈川県総合薬事保健センター303-304号室	横浜市南部地域療育センター所長井上氏を迎え、センターで取り組む超早期支援や保護者支援の実際について講演した。後半は、ADDS竹内より、本プロジェクトの解説と超早期の支援に活用できるABAに基づく個別支援についてワークショップを行った。	保護者、療育・教育機関関係者、行政関係者	30名
(1)11/11 (2)1/21	発達障害児に対するリハビリテーション研修会-介入効果を高める応用行動分析を用いた関わり-	慶應義塾大学グローバルセキュリティ・リサーチセンター4階セミナー室	行動リハビリテーション研究会、慶應義塾大学と連携し、有資格者に限定した研修会を実施した。第1回目は本プロジェクトの説明と、ABAに基づく早期療育支援の概要についての講義とワ	言語聴覚士、作業療法士、理学療法士	20名



			ークショップ、第2回目は参加者が現場の事例を持ち寄り、事例検討を行った。		
12/10	実装PJ第1回公開シンポジウム『エビデンスに基づく早期療育モデルで描く未来-地域で拓く親子の可能性-』	慶應義塾大学北館ホール	関東、香川、熊本の連携機関と共同で、1年の実装の成果報告を実施した。また、基調講演に慶應義塾大学山本教授、招待講演として国立精神・神経医療研究センター神尾氏、厚生労働省日詰氏が登壇し、エビデンスに基づいた早期療育をわが国でどのように広げていくか、についてパネルディスカッションを実施した。	保護者、療育・教育機関関係者、行政関係者	250名
1/20	第3期ぺあすく保護者向け説明会（千葉）	ぶりんぐあっぷちば子ども支援センター	ぺあすく参加を検討する保護者向け説明会を各機関代表者、セラピストとともに実施。JSTによる採択の流れ、連携機関紹介、ぺあすく成果、各機関での参加希望家庭の募集や研究同意について説明、質疑を行った	保護者	30名
1/20	発達が気になる子の地域研修会(千葉)「地域で行うABA個別療育と保護者支援」	ぶりんぐあっぷちば子ども支援センター	ぶりんぐあっぷちば子ども支援センターと連携し、センターで取り組むぺあすくの実際についての講演や、ABAに基づく早期の個別支援についてワークショップを行った。	保護者、療育・教育機関関係者、行政関係者	40名
2/12	児童発達支援 ADDS Kids1st 鎌倉×放課後等デイサービスミライエ 鎌倉 合同事前説明会	鎌倉市由比ガ浜こどもセンター 3F	午前と午後の2部構成で、利用希望者に向けた事前説明会を実施。「ADDS・ミライエ共同企業体」が、AI-PACを活用し幼少期から学齢期まで連携した支援を行う旨や利用方法を説明した。	保護者	40名
3/11	第3期ぺあすく保護者向け説明会（神奈川）	児童発達支援マルシェ	ぺあすく参加を検討する保護者向け説明会を各機関代表者、セラピストとともに実施。JSTによる採択の流	保護者	20名

			れ、連携機関紹介、ペア すく成果、各機関での参加希 望家庭の募集や研究同意に ついて説明、質疑を行った		
--	--	--	--	--	--

### 3-3. 書籍、DVD

### 3-4. ウェブサイトによる情報公開

NPO法人ADDS HP, <http://www.adds.or.jp/archives/131>, 2018年2月7日

### 3-5. 学会以外のシンポジウム等への招聘講演実施等

### 3-6. 論文発表

(1) 国内誌 (\_\_\_\_件)

(2) 国際誌 (\_\_\_\_件)

### 3-7. 口頭発表 (国際学会発表及び主要な国内学会発表)

(1) 招待講演 (国内会議\_\_\_\_件、国際会議\_\_\_\_件)

(2) 口頭発表 (国内会議 1 件、国際会議\_\_\_\_件)

・川野綾乃・榎本大貴・竹内弓乃・塩田心・吉川徹 (2017). 日本の療育・保育・教育におけるABA活用の課題と挑戦 日本行動分析学会35回年次大会. コラッセふくしま, 福島

(3) ポスター発表 (国内会議\_\_\_\_件、国際会議\_\_\_\_件)

### 3-8. 新聞報道・投稿、受賞等

(1) 新聞報道・投稿 (\_\_\_\_件)

(2) TV放映 (\_\_\_\_件)

(3) 雑誌掲載 (\_\_\_\_件)

(4) 受賞 (\_\_\_\_件)

### 3-9. 知財出願

### 3-10. その他特記事項